

# 下斗米 勤一（しもとまい・きんいち）

## 1、プロフィール

昭和5年八戸市で県南地方初の自立劇団「八戸公共小劇場」を結成。年6回の公演をもつ。新聞記者としても八戸毎日、奥南新報、東奥日報、デーリー東北新聞社などで活躍した。

<生没>

1901(明治 34)年5月 18 日 ~ 1994(平成6)年5月 31 日

<代表作>

戯曲集『軍記の懊悩』

<青森との関わり>

県南地方で初めての演劇グループ「八戸公共小劇場」を結成、傍らデーリー東北新聞社などで敏腕をふるった。

## 2、作家解説

劇作家。新聞記者。明治 34 年5月 18 日、八戸市に生まれる。大正 14 年県立八戸中学校第3学年次にて中退。家業は米穀商であったが彼は継がず、20 歳の頃からデーリー東北新聞社の監査役として退職する平成3年6月まで、60 余年にわたって八戸毎日新聞社を振り出しに奥南新報、東奥日報などで新聞社生活を続けた。その傍ら昭和5年の春八戸市で県南地方初めての演劇グループ「八戸公共小劇場」を結成、6回の単独公演をもち、自らも演出だけではなく、演技者としても活躍した。昭和 55 年県文化賞、58 年県褒賞、59 年勲五等瑞宝章を受章。最初の戯曲を書くことになったきっかけは、岡本綺堂監修の演劇雑誌「舞台」の昭和 13 年新春特別号に「女房」1幕2場が掲載されたからである。しかし、新聞記者としての仕事と家族の生活上のこともあり、劇作からは遠ざかるを得なかった。とは言うものの創作への意欲は尽きることなく、作品は未発表のまま書きためられていた。昭和 22 年 12 月7日、デーリー東北主催の第1回県下演劇コンクールが

湊座で開催された。日東化学、吹上青年団など9団体、昼夜2回公演超満員の熱気に包まれた。翌23年、その勢いは全団体を結集し八戸演劇研究協議会へと発展、代表川合勇太郎、各専門部長に下斗米勤一、岩館千松、柴田正夫、岩佐辰雄、村井良孝が名を連ねた。昭和31年市内4劇団に職場演劇の仲間を加え、大同団結「北国」が誕生、旗上げ公演は三好十郎の「獅子」であった。昭和34年11月神亮一が「くるま座」を結成、初演に下斗米勤一作の「奈落の家」が取りあげられ、続く第3回公演にも「亡者の池」が上演された。昭和49年「月刊きたおうう」が発刊されるに及んで戯曲シリーズとして書いた作品と未発表の作品をまとめて昭和51年9月戯曲集『軍記の懊悩』を刊行した。また三八地区高校演劇連盟が組織されるや創作と並行させて劇評のペンも執り、高校演劇活動にも声援を送った。

平成6年5月31日、老人性肺炎のため八戸赤十字病院で死去。享年84歳。

### 3、資料紹介

#### ○戯曲集『軍記の懊悩』

図書

1976(昭和51)年9月1日

130mm×187mm

昭和13年、岡本綺堂の演劇雑誌「舞台」に「女房」1幕2場が掲載。デーリー東北新聞社が「月刊きたおうう」を発行するや戯曲シリーズとして発表した「軍記の懊悩」「傘の中」など29篇の中の12篇を選びまとめた。時代の推移に揺れる庶民生活が描かれている。

#### ○八戸公共小劇場第1回公演「番小屋」舞台写真

視聴資料(舞台写真)

1930(昭和5)年

昭和5年の春、演劇愛好の仲間12、3人で八戸公共小劇場を結成、旗上げ公演を八戸市内の錦座でもった。女優志願者が少なく、2名のみであったため公演

の出し物も一幕物4本のうち女性1人が出演するものは2本であった。「番小屋」は2本の中のひとつである。

○八戸公共小劇場第6回公演舞台写真「上陸第一歩」

視聴資料(舞台写真)

1932(昭和7)年

137mm×295mm

昭和5年春に旗上げた八戸公共小劇場は昭和7年の第6回公演をもって幕を閉じた。これはその時の一作、北村小松作「上陸第一歩」の舞台写真である。ほかに金子洋文作「洗濯屋と詩人」などが上演された。

○「月刊きたおうう」

雑誌

1974(昭和49)年～1978(昭和53)年

250mm×175mm

「月刊きたおうう」は昭和49年4月から昭和53年3月まで八戸市のデーリー東北新聞社から発行された。昭和49年5月から52年10月号にかけて下斗米勤一戯曲シリーズとして「花火」ほか12篇の作品を発表している。

○八戸公共小劇場第1回旗上げ公演のメンバー

視聴資料(記念写真)

1930(昭和5)年春

108mm×123mm

昭和5年の春、八戸公共小劇場として旗上げ公演が行われた時の劇団員の舞台上での記念写真である。出し物は4本であったがこの写真の舞台背景はこの4本の中のひとつアプトン・シンクレア作「二階の男」である。貴重な女優2人が写っている。